

言語から見た中国の文化と 日本の文化の相違点

崔 春 基

はじめに

前回では、言語から見た中国の文化と日本の文化の違いとして、中国人は気の長い勤勉な国民で、望みの実現の可能性がないものと見た場合でも簡単に諦めることなく、他に実現の道は必ずどこかにはあるはずだと信じ込んで、容易に後ずさりはしない国民であるのに対して、日本人は活動的である勤勉な国民で、望みの実現の可能性がないものと判断した場合は、潔く諦める国民であることを述べた。しかし、ここでは言語による文化の違いとして、中国人は、日本人から見た場合、何時も矛盾したことをするのにに対して、日本人は、中国人から見た場合、いくつも選択肢はあるのにみんながよってたかって同一の選択肢を選ぶ（横並びになる）、不思議な行動をとる国民であることを見てみることにする。

一 「你去不去？」と「いらっしゃいますか」

さて、「你去不去？」に当たる日本語として「いらっしゃいますか」が挙げられる。中国語のこのような疑問文を「反復疑問文」といったり、「肯定否定の疑問文」といったりで、人によって呼び方もそれぞれ違いますが、このような疑問文は、日本語に翻訳することはできるけれども、日本語には存在しない疑問文であると見ることができるだろう。というのは、食べ物を目指しながら、「你吃不吃这个？」と言う場合、日本人なら、「これ、召し上がる？」とは言いが、「これ、召し上がる？ 召し上がらない？」（或いは、これ、食べる？ 食べない？）とはまず言わないからである。

ところで、このような疑問文は、動詞だけに限るものではない。「这个

贵不贵？」(これ高いですか)、「这个车好不好？」(この車、どう？ いいだろう！)のような形容詞文、つまり、動きを表わす文だけではなく、状態を表わす文にも見られる現象である。

もちろん、動詞文の「你吃不吃这个？」のような文や、形容詞文「这个贵不贵？」のような文が日本語には存在しないということは、このような文が日本語には翻訳できないという意味ではなく、日本人なら、このようなことを言いたい場合、たとえば「你吃不吃这个？」と言いたい場合は、「これ、食べる？」とか、「これ、食べない？」とは言うが、「これ、食べる？ 食べない？」とは言わないと言う意味である。従って、中国人は動作を言う場合であろうと、状態を言う場合であろうと、人に二つの可能性を提示して、その内の一つを選ばせるのに対して、日本人は動作を言う場合であろうと、状態を言う場合であろうと、人に一つの可能性を提示して選択を促すのが特徴的であると言えることができるわけである。

これはすなわち、中国人は、動作や状態に関することを人に聞く場合、話し手として先ず頭に浮かぶのは、それらの動作や状態の両極(例えば、「行く」の場合、「行くか」、「行かない」の両極)であるのに対して、日本人は、動作や状態に関することを人に聞く場合、話し手として先ず頭に浮かぶのは、動作や状態の、一極(例えば、「行く」という一極)であるという意味である。このように、中国語と日本語には、質問者の表現意識として以上のような根本的な違いがみられる。

一方、質問者の答えを考えた場合、例えば、「你去不去？」と「あなた、行く？」、或いは「あなた、行かない？」の答えを考えた場合、両方も、婉曲な答えであるか、単刀直入の答えであるかを無視すれば、「行く」或いは「行かない」のようになるので、相違点がないように思われがちであろう。ところが、実は、答えにも両国語の相違点は見られる。例えば、「你忙不忙？」(あなた、忙しい?)の場合、答えとしては、中国語であろうと、日本語であろうと、「我忙」「我不忙」、「忙しい」「忙しくない」のように、肯定、或いは否定の両方しかないように思われるが、実は、中国語の場合、「我忙」よりむしろ、「我很忙」「我非常忙」「我太忙了」等の方がよく使われる。

動詞文の場合でも中国語は、前回でも述べたように、例えば「勉強す

る」の場合、これに対応する文として、「好好儿学习」、「努力学习」、「认真学习」のように多岐に分かれるのが一般的である。即ち、一極の「勉強する」に対して、「好好儿学习」、「努力学习」、「认真学习」等の多極が対応する。従って、中国語と日本語には、質問文とその答えを全体的に眺めてみた場合、二極（或いは二極以上）対一極、という差異が見られるということが考えられる。

このような、言語表現上の特徴は、言うまでもなく一朝一夕にして出来上がったものではなく、長い歴史を経て形成されたものなので、言葉を使う民族や国民は、二極性や一極性のようなものは意識せずに使っているが、そもそも人間は言葉によってものを考えるので、言葉の表現形式が違うということは人間の考え方が違うということにつながり、人間の考え方が違うということは、また、行動も違ってくるということである。従って、二極性の言語表現をする中国人と、一極性の言語表現をする日本人とでは、行動も違ってくるわけである。

ところで、人間は、個人的には、ある考えを持っていても、その考えを行動に移すとは限らないが、ある考えが民族や国民の考え、即ち、民族や国民の客体に対する見方となると、つまり、民族や国民の価値観となると、その民族や国民に属する個別の人は、その考え道りには行動をしないこともあるが、多数の人はなんらかの行動を取ると、無意識中にその行動が、民族や国民の価値観に合致するような行動になってしまうことがある。従って、二極性の考えや一極性の考えが、民族や国民の考え方になると、民族や国民の多くが、ある行動を取った場合、それが二極性や一極性に合致するようなものになってくることがある。そこで、ここでは、中国語の「二極性」というものと、日本語の「一極性」というものをもう少し詳しく考察することにする。

二 「我忙他不忙」と「私は忙しいが彼は忙しくない」

この中国語の文と日本語の文は、全く同じ意味で、しかも、両方とも「二極性の文」であると見ることが出来る。つまり、「我忙他不忙」は、「我忙」（私は忙しい）という「一極」と、「他不忙」（彼は忙しくない）という「一極」から成る文であると見ることができ、日本語の「私は忙

しいが彼は忙しくない」も、「私は忙しい」の「一極」と、「彼は忙しくない」の「一極」から成る文であると見ることができる。

ところが、中国語の「我忙」という一極は、独立の文としては非常に座りが悪く、「我忙他不忙」と二極が合体となって、はじめて座りがよくなって来る。つまり、二極が合体となってはじめて完全な一つの文となって来る。これに対して日本語の場合は、「私は忙しい」、或いは「彼は忙しくない」という両極の、いずれの一極を取ってみても、座りのよい完全な文となっている。従って日本語の場合は、「私は忙しい」と、「彼は忙しくない」を、独立文として使う場合が多く、この二極を合体して使うことは、むしろ希なことである。従って、もうここで中国語は「二極性」の文が多く、日本語は「一極性」の文が多いという結論を出してもよさそうであるが、ここではもう少し詳しく見てみることにする。

さて、中国語の場合は、「这个小那个大」(これはそれより小さい)、「我大他小」(私の方が彼より年上である)、「这个便宜那个贵」(これはそれより安い)、「我忙他不忙」(私は彼より忙しい)等を見ても分かるように、二極が完全に一体となって、はじめて、一つの文として落ち着いてくる。ところで、ここでは、これらの中国語の文を、便宜上二極の比較の意味に翻訳したが、次のように二極の対立の意味に翻訳することもできる。「这个小那个大」(これは小さいがそれは大きい)、「我大他小」(私は年長者であるが彼は年少者である)、「这个便宜那个贵」(これは安いがそれは高い)、「我忙他不忙」(私は忙しいが彼は忙しくない)。このように、いずれも二極が合体して始めて、一つの落ち着いた文となる。

そもそも中国語の一音節形容詞の形容詞文は、はじめから座りが悪いので、比較の意味を表わす文か、対立の意味を表わす文など、二極性の文にして使うのが普通であるが、どうしても一極性の形容詞文を作らなければならない場合は、「我很忙」(私は忙しい)、「她真美」(彼女は美しい)のように、「很」や「真」等の副詞で形容詞を修飾しなければならない。中国語の一音節の形容詞文は、「很」や「真」等の修飾の成分が入っても、それらを強く強調しない限り、元の意味は変わらないのである。もし、「私は本当に忙しい」、「彼女は本当に美しい」と言いたければ、「我很忙」、「她真美」の、「很」と「真」を強く発音すればいいわけであるが、普段は、「我很忙」や「她真美」と言っても、中国人はただ「私は忙

しい」や「彼女は美しい」としか思わないのである。従って、普通の場合、「很」や「真」を入れる目的は、座りの悪い一音節形容詞文を、座りの良い形容詞文に作り上げるためであると見てもよいわけである。

このようにみえてくると、今度は、日本語の「私は忙しい」という一つの文に対して、「我很忙」、「我非常忙」、「我太忙了」のような多数の中国語の文が対応することになる。このような現象は何も形容詞文だけではなく、動詞文の場合にも見られる現象である。例えば、「今学期は勉強するぞ」という一つの日本語の文に対して、「这个学期我好好儿学习」、「这个学期我努力学习」、「这个学期我认真学习」のようにいくつもの中国語の文が対応する。

以上のように見えてくると、中国語の「这个小那个大」、「我忙她不忙」のような二極性の文は、日本語の「これは小さい」、「私は忙しい」のような一極性の文に対応し、「我很忙」、「我非常忙」、「我太忙了」のような一極性の多数の中国語の文は、「私は忙しい」のような、一極性の一つの日本語の文に対応することが分かる。

つまり、一極性の一つの日本語の文は、常に二極、或いは、二極以上の中国語の文と対応することが分かる。そして、この対応関係は、状態を表わす文だけではなく、動きを表わす文、即ち、動詞文にも成立する関係であることが分かる。

では、名詞文の場合はどうであろうか。もし、名詞文においても、このような関係が成立したら、中国語と日本語は、言語表現のほとんどの範囲においてこの関係が成立することになる。そこで次ぎは名詞文の場合を考察することにする。

三 「她是不是学生？」と「彼女は学生ですか」

中国語は、名詞文にも「是」という動詞を用いるものがある。従って、中国語の名詞文は、動詞「是」を用いるものと、動詞「是」を用いないものの二種類に分けることができるが、名詞文全体からみた場合「是」を用いる名詞文の方が用いないものより遥かに数が多く、動詞「是」を用いない名詞文は、せいぜい日時、天候、出身地、年齢などを表わす会話文ぐらいなものである。そこで、先ず、「是」を用いるものから見てい

くことにする。

さて、「她是不是学生？」は、直訳すると「彼女は学生ですか？ 学生ではありませんか？」になる。もちろん「是」の語気を強めることによって、「彼女はまぎれもなく学生だ」というような意味にもなるが、ここでは、一般的な素直な意味の「彼女は学生ですか？ 学生ではありませんか？」の場合を見ることにする。

「她是不是学生？」が、「彼女は学生ですか？ 学生ではありませんか？」という意味の場合は、動詞や形容詞の場合と同様に、日本人だったら、「彼女は学生？」、或いは「彼女は学生ではないですか」と聞くはずである。従って、「她是不是学生？」は、「彼女は学生ですか」と同じ意味であると見ることができ、しかも「她是不是学生？」自身は、二極性を具有するので、「她是不是学生？」と、「彼女は学生ですか」との対応関係は、「二極性」対「一極性」の対応関係となってくると見ることができる。

ところで、「是」を用いない「今天二十九号」、「她大连人」、のような名詞文は、日本語とどんな関係があるだろうか。このような名詞文は、次のように疑問文に直してみると、「今天二十九号吗？」(今日は29日ですか)、「她大连人吗？」(彼女は大連出身ですか)となって、日本語の場合と全く同じである。従って、「是」を用いない名詞文と、日本語の名詞文との対応関係は、一極性対一極性であると見ることができよう。

しかし、中国語には一見日本語と同じような選択疑問文という疑問文がある。例えば、「今天二十九号还是三十号？」(今日は29日ですか？ それとも、30日ですか?)、「她大连人还是上海人？」(彼女は大連出身ですか？ それとも、上海出身ですか?) のような文である。

ところが、この種の疑問文は、日本語の選択疑問文とは、違うところがある。例えば、「她大连人还是上海人？」の日本語の意味は、「彼女は大連出身ですか？ それとも、上海出身ですか？」である。つまり、

- ①「她大连人还是上海人？」=「彼女は大連出身ですか？ それとも、上海出身ですか？」

のように、意味的には等しいが、左側は「？」が一つしかないのに、

右側は「？」が二つあるのが特徴的である。日本語の場合、「？」よりもっと大事なものは、終助詞「か」である。この終助詞「か」は、文において二つの意味を表わす。一つは疑問の意を表わし、もう一つは文が終わったことを表わす。従って、右側は、文が二つであることを意味し、左側は文が一つであることを意味する。そのためこれまで見てきた、中国語の二極性と、日本語の一極性とは矛盾するのではないかと思われるかもしれないが、実は、日本語はこの場合においても、「彼女は大連出身ですか」というのが普通で、よほどでないとうり右側全体は言わないようである。このような場合も、日本人の以心伝心が働くのか、中国人がよく言う「日本人は物を言う時、半分しか言わない癖がある」というその癖が働くのか、一般的には

②「她大连人还是上海人？」=彼女は大連出身ですか。

と成るようである。つまり、二極性対一極性に成るようである。

因に、中国語の選択疑問文と、日本語の選択疑問文の違いは、①の右側には終助詞「か」が二つも付くのに、左側の中国語には「か」に当たる「吗」が一つも付かないのを見ても分かる。このように日本語の選択疑問文には、終助詞「か」が現れるので、日本人の中国語学習者は母語の干渉を受けて、絶対「吗」を付けてはいけない①の左側に、よく「她大连人还是上海人吗？」のように「吗」を付けて、非文法文を作ってしまうこともある。

四 「二極性対一極性」の成立範囲と、「二極性対一極性」の本質

以上、中国語の二極性（或いは多極性）と日本語の一極性の対応関係を見てきたが、この対応関係が成り立つ範囲は、動詞文、形容詞文（日本語の形容動詞文を含む）、多数の名詞文という範囲である。中国語と日本語は、文の種類を、1 動詞述語文（動詞文）、2 形容詞述語文（日本語の形容動詞文を含む）、3 体言述語文（「是」を用いる名詞文を含む）、4 主述成分述語文の四種に分けることもできるが、その内の4は、1か2のいずれかに入れられるので、上述の「二極性」と「一極性」

の対応関係は、中国語と日本語のほとんどの範囲において成り立つものと見ていいわけである。即ち、この関係は中国人や日本人が使う言葉の、ほとんどの範囲にわたって、成り立つ関係であると見ていいわけである。

これは、1, 2, 3の範囲、つまり、状態を表現する範囲、動作を表現する範囲、事物に対する判断などを表現する範囲において、中国人は直接的には二つ（或いは二つ以上）の局面を考え、日本人は、直接的には一つの局面を考えるということである。例えば、中国人が、「你要不要这个？」（これ要りますか要りませんか）と言う場合、心の中では、「你要我就给你」（要りましたらあなたに上げる）、「你不要我就扔了」（要らなかつたら捨てます）というような局面を考えたりする。だから、中国人は、よく「你要不要这个？」と言った後に続いて、「你要我就给你，你不要我就扔了」とずばりと言ってしまうことがある。しかし、日本人は、このような場合、「これ、よかつたらどうぞ」とか、「これ、よかつたら…」と言うだろう。つまり、一極性の表現、一つの局面の考え方である。

さて、上述の、「一極性」対「二極性」の関係は、本質的には、抽象化対具体化と見ることができる。というのは、見掛けは

③よかつたらこれどうぞ。=你要不要这个？

のように、両方とも一つの文であるが、実は、「よかつたらこれどうぞ」の情報の総量は、「これ要りますか」+「要りませんか」の総和であると見ることができるからである。

同じく、「これは鉛筆ですか？」の情報の総量は、「これは鉛筆ですか」+「鉛筆ではありませんか」の情報の総量と見ることができる。ところが、「これは鉛筆ですか」+「鉛筆ではありませんか」=「这是不是铅笔？」と見ることができる。従って、中国語の「这是不是铅笔？」は、「これは鉛筆ですか？」を具体化したものであると考えられる。

また、「今学期は勉強するぞ」は、「这学期我好好儿学习」（今学期はちゃんと勉強するぞ）とも、「这学期我努力学习」（今学期は一生懸命勉強するぞ）とも、又は、「这学期我认真学习」（今学期はしっかり勉強するぞ）とも、翻訳できる。従って、情報量としては、「今学期は勉強するぞ」は、三つの中国語の文の情報量の総和と見ることができるだろう。因つ

て、中国語の一つ一つは、日本語を具体化したものであると見る事ができる。以上のようなわけで、日本語は中国語を抽象化したものであると見る事ができ、中国語は日本語を具体化したものであると見る事ができると思う。

一方、日本語同士だけを見ればあい、例えば、日本語には確かに、「今学期は熱心に勉強するぞ」、「今学期はしっかり勉強するぞ」という言葉はあるが、「今学期は勉強するぞ」と比較したばあい、どこか余計な感じがする。新学期を迎えた学生が、前学期の不勉強を反省し、勉強の意欲を新たに奮い起こしながら一言発する時は、やはり「(今学期は)勉強するぞ」ではないだろうか。このばあいの「(今学期は)勉強するぞ」、或いは「ようし、勉強するぞ」と、「今学期は熱心に勉強するぞ」もしくは「今学期はしっかり勉強するぞ」とは、何処が違うかという点、後の二つの文は具体的であるのに対して、「ようし、勉強するぞ」は抽象的である。日本語はこのように具体的な文が、抽象的な文に傾いていくのが特徴的である。

以上で、中国語は、日本語より具体的であるということが分かり、日本語同士の中では、具体的な文が抽象的な文に傾いていくことが分かった。中国語が日本語より具体的であるということは、「我们再也不用愁锅底的烧柴了」と「薪の心配は要らなくなった」を比較してみたら分かる。この中国語を日本語に直訳すると「われわれは鍋の下の薪は二度と心配をしなくても済むようになった」となる。これと、「薪の心配は要らなくなった」とはどちらが具体的であるかは自明のことであろう。これは文のばあいであるが、中国語は無限に多い名詞の場合でも、抽象語は少ないと言われている。中国語の名詞に抽象語が少ないということは、林語堂氏が1930年代にすでに指摘した事実である。林語堂氏は、中国語の名詞には、「单刀直入」、「马屁股上放鞭炮」(結び直前の最後の一撃)のような、「意象語」は多いが、「過程」、「個性化」などのような抽象語は非常に少ないと指摘している。(『中国人』学林出版社 1995年版 p 95)

林語堂の挙げた抽象語の例、「過程」、「個性化」などの語は明治維新以後日本から中国に入った語である可能性もある。最近日本から中国に入った語に「選手」が挙げられるが、この「選手」も、中国語で「選手入場」と「运动员入場」の両方を比較してみると、従来中国人が使って

いた「運動員」よりは、抽象的な気がする。このように、日本語は中国語より抽象的であるが、日本語は和語の場合でも中国語より、抽象的な語が多いようである。例えば、「ようし、あしたはしらべるぞ」という文は、中国語に直すと、「我明天好好儿调查一下」、「我明天仔细调查一下」、「我明天认真调查一下」などとなるが、これらを日本語に直すと、「私はあした綿密に調べる」、「私はあした詳しく調べる」、「私はあした念入りに調べる」となる。このように見てくると、どちらが具体的か、どちらが抽象的かは自ずから明白に成ってくる。従って、「二極性」対「一極性」の本質は、「具体的」対「抽象的」であると考えられる。

五 「二極性対一極性」と「二辺倒の中国人対一辺倒の日本人」

さて、「二極性対一極性」は、中国語と日本語のほとんどの範囲において成り立つ関係であり、しかも、その本質は、中国語の「具体性」に対応する日本語の「抽象性」であることが分かった。ところで、「抽象」というのは、「具体」の個々を集めた「一極」で、具体の個々が行き着くところであるので、状態に関する表現、動作に関する表現、事物の判断などに関する表現、つまり、人間の考え方が(言語表現が)、個々別々に分かれる場合、それを一つにする性質が「抽象性」である。従って、日本語の「一極性」というのは、人間の考え方が別々に分かれるのを一つにする性質である。これに対して、中国語の「二極性」というのは、人間の考え方(言語表現)を、細かく分ける(具体的にする)性質である。

当然ながら、このような「二極性」と「一極性」による人間の行動にも相違点が見られる。まず中国人の行動であるが、ある行動をしながら他の行動を考えると、公の立場にいながら私利を忘れないとか、政府の役人や軍が商売をするとか、人から聞いた話は、そうであるかも知れないし、そうでないかも知れない(二点論)と思うとか、言語表現を具体化するあまり、人間の考え方が常に「二極化」し、行動もそれに伴う。現在中国では政府役人の腐敗化が大問題になっているが、これはなにも近年に始まったものではない。大昔からあったものである。大昔から中国語には「二極性」の表現があったし、「二極性」の思考法による行動があったのである。だから、昔から官職に就いていながら私利を図った者

があったのである。言ってみれば役人の腐敗化は、公の立場にいながら私利を忘れないからであるが、ハルビン市に一つの例がある。これはある新聞の記事（98， 8， 13日付け）であるが、ハルビン市の地下商店街の管理会社社長張庭浦という人の贈収賄事件に巻き込まれた人，100人ぐらい，その中庁長クラスの者7人，処長クラスの者18人，副市長朱勝文という者無期懲役，共産党市委員会書記（市長クラス）刑務所入り，省書記（省長クラス）引退という形の解任という記事であった。

中国人は，ある仕事をしながら常に首になった場合を考える（二極性の考え），そしてその考えが行動となってくることがある。役人が収賄をする場合，首になった場合の生計を考えて収賄することもあるが，これが二極性からくる行動の一種である。ハルビン市の収賄者の中にはこのような行動を取って，後悔する者も多いと思う。48年前，国民党が崩れかかった時，多くの者が寝返りを打ったが，その行動も二極性による行動であったかも知れない。

これに対して，日本人は，個々の行動の自由を許しても，その個々の行動を取らずに，一つの行動に成ってくることがある。つまり，「一極性」による行動を取ってしまう。例えば，日本の女子高校生の制服のことであるが，どんな制服にするかは，各学校が決められると思うし，現に高校ごとに制服は違っている。しかし，各高校が，女子高生のルーズ・ソックスまで統一を強要はしていないと思うが，それもみんなが寄ってたかって統一している。いや，一校ではない，日本全国どこへ行っても，色も同じ，全く同じ物である。これこそ日本の文化である。個々の行動が，ほうっておくと自然に一極に傾いてしまう。

以上のような中国人の行動と，日本人の行動を指して，森三樹三郎氏は，内山完造という人の言ったことを引用して次のように述べているが，少し長いけれどもここに引用する。

中国人はほうっておくと両辺倒になる民族である。つまり，何かすばらしいことを聞いたばあいに，なるほどと一応は感心するけれども，しかし人間の言うことであるから完全であるはずはない。それは一面の真理ではあろうが，別の角度から見れば，また違った見方があるかもしれぬ，ということをも本能的に感じとるのである。そ

れはインテリばかりではなくて、無知な農民に至るまで同じである。だからこそ「一辺倒たれ」という教訓が必要になる。

これに反して日本人は、ほうっておけば一辺倒になる民族である。何かよいことを聞くと、すぐこれを絶対化して、身も心も帰依するというふうになる。だから日本では「両辺倒たれ」というのが教訓としてふさわしいというのであります。

(『中国文化と日本文化』森三樹三郎 人文書院 p31)

これは「二極性対一極性」の行動的特徴を、如実に表わした典型的な見解であると思う。しかし、森三樹三郎氏はこの後、このような違いが生まれてきた原因として、次のようなことを言っている。「二辺倒」は、中国の支配者や支配原理が頻繁に変わっているから、それに慣れて、一つの原理を絶対化しなくなったからといい、「一辺倒」は、四方を海に囲まれた孤島に住んでいた日本人が、「別荘育ちの坊ちゃん」、「苦勞知らずの箱入り娘」であったため、うぶで純真で、箱を開けたとたん、目に入ったものにすぐ惚れてしまうからであるといっている。

この原因については、人それぞれ独自の見解を持っているので、私如き者が何かを言える立場ではないが、ただ世界中には島国がたくさんあって、孤島という点では日本以上の国もあったが、それらの国は「一辺倒」にならなかった点をどう説明すれば良いのか。それから「二辺倒」のばあい、無知の農民が本能的に、インテリと同じ程度に、中国人が普段良く言う「二点論（一つの事物を両方から見て分析する見方）」を操っていたというが、支配原理の変化だけで無知の農民がそうなるかどうかと疑いたくなる。

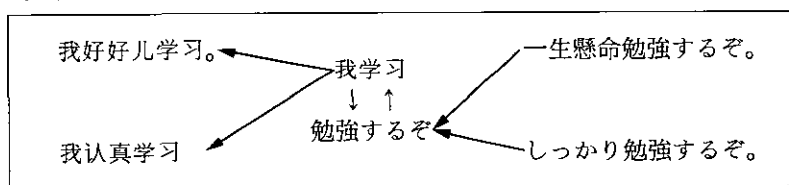
というのは、昔の中国の百姓は、役場（衙門）が何処にあるのかも知らずに一生を過ごした人も多く、ましてや支配者の支配原理など、百姓には全然無縁のもので、社会倫理や法律すらなかった片田舎のものが、支配原理などを気にするわけがないし、誰がどういう原理で支配しようと先祖から受け継がれてきた生活様式などを、少しも変えずに一生を過ごす百姓達が、支配原理の変化に慣れて「二点論」を操るようになったというのは、ちょっと信じられないからである。

やはり、自分の使っている言葉の表現形式から生まれた考え方、その

考え方から生まれた行動こそが、無知の農民をそのようにさせたのではないかと思われる。

むすびにかえて

中国語と日本語の間には、動詞述語文、形容詞述語文（形容動詞述語文を含む）、体言述語文の範囲において、つまり、動作を表現するばあい、状態を表現するばあい、事物の判断などを表現するばあいにおいて、「二極性」と「一極性」という対応関係が見られる。ここで言う「二極性」というのは、言語表現を二極以上に具体化することを指し、「一極性」というのは、二極以上の具体的な言語表現を一極に抽象化することを指す。動作を表わすばあいの「二極性」と「一極性」の対応関係の例を、具体的な文で示すと、次の表のようである。



この表を見ても分かるように、中国語の「我学习」は二つの具体的な文「我好好学习」と「我认真学习」に分かれていくのに対して、日本語の「(今学期は)勉強するぞ」は、具体的な文「(今学期は)一生懸命勉強するぞ」と「(今学期は)しっかり勉強するぞ」が抽象化してできている。

どうしてこんなことが言えるかという、中国語の「我学习」は「这学期我学习」(今学期私は他のことをせずに勉強することになった)を見ても分かるように、話し手の意思を表わす文としては座りが悪く、「我好好学习」や「我认真学习」となるとはじめて落ち着きの良い文となり、日本語のばあいは「一生懸命勉強するぞ」や「しっかり勉強するぞ」と言うのはなんだか余計な感じがし、「(ようし)勉強するぞ」と言うだけで十分な気がするからである。

以上の中国語のこのような性質を「二極性」といい、日本語のこのような性質を「一極性」というと、中国語と日本語の対応関係は、「二極性」

対「一極性」となる。

ところで、この「二極性」と「一極性」というのは言葉の表現の特徴であるが、人間はそもそも言葉によってものを考え、考えによって行動をするので、言葉の表現が違うということは、考えも違うということであり、考えが違うということは、行動も違うということである。従って、「二極性」と「一極性」の違いというのは、行動の違いにもつながるわけである。そこで本論の方では、中国人の行動と日本人の行動の違いも見ただけであるが、ここでは、中国人の行動は「二極性の行動」と称し、日本人の行動は「一極性の行動」と称することにする。

動詞のばあいの表を見てもわかるように、「二極性の行動」というのは、二極に離散する行動を指し、「一極性の行動」というのは一極に集中する行動をさすが、それぞれのプラス面の例を一つずつ挙げると、「二極性の行動」のばあいは、事物を二つの側面から分析してとらえようとするものが挙げられ、「一極性の行動」のばあいは、全国の女子高生が一律に白いルーズ・ソックスをはくような行動、つまり、皆がとる行動（集団行動）をとりたがる（横並びになる）ことが挙げられよう。

さて、「二極性の行動」をとる人は、「一極性の行動」をとる人のことを不思議に思い、「一極性の行動」をとる人は、「二極性の行動」をとる人のことを不思議に思うことがあるが、それは、人間が異文化を不思議に思うところから来るものである。ただ、「二極性の行動」と、「一極性の行動」の源泉としては、中国語と日本語という、違うものであることを最後に強調しておきたい。

【引用文献】

- 1 『中国人』 林語堂 学林出版社 1995年
- 2 『中国文化と日本文化』 森三樹三郎 人文書院 1993年版